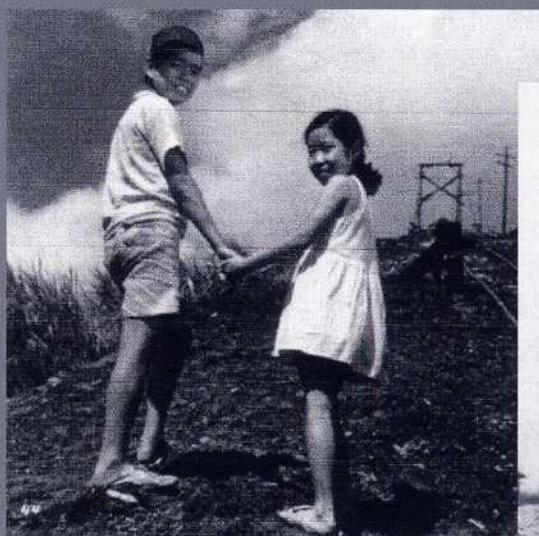


映画と講演

映画をとおして人権を考える



第3回人権問題講演会(入場無料・定員100名 *申し込みは不要です)

10月5日(土)13:30~16:30 コムズ 5階 大会議室

映画:「にあんちゃん」 1959年日活・今村昌平監督作品

講演:「在日として生きる」

四国朝鮮初中級学校
教育総務部長 高正範さん

「私と朝鮮学校の子どもたち」

元・中学校校長 中林重祐さん

にあんちゃん

D
O

主催:NPO法人「Do」
(松山市委託事業)

後援:松山市教育委員会・松山市公民館連絡協議会・松山市人権教育推進協議会
愛媛新聞・NHK松山放送局・南海放送・テレビ愛媛・FM愛媛・あいテレビ
愛媛朝日テレビ・愛媛CATV・リビングまつやま

-あらすじ-

昭和二十八年の春。佐賀県にある鶴ノ鼻炭鉱ではストライキが行われていた。

そのさなかに、安本一家の大黒柱である炭鉱夫の父親が死んだ。残された喜一、良子、高一、末子の四人の子供たち。喜一は二十歳になったばかりだ。安本一家が住んでいる山の中腹の長屋の人たちも、皆その日暮しの苦しい生活をしていた。長屋の子供たちは学校へ弁当も満足には持っていない。喜一が失業した。

一家共倒れを防ぐため、高一と末子を辺見家にあずけ、喜一は良子と長崎に働きに出かけた。しかし、辺見家でも生活は苦しく末子は栄養失調になった。赤痢が発生した。末子も罹病した。保健婦のかな子と、末子の担任教師桐野が働いた。やがて、決定的な時が来た。会社が炭鉱を廃坑すると宣言したのである。人々はやむなく家をたたみ、山を下りていった。高一と末子も、帰って来た喜一に連れられて、閔さんの家に引きとられた。しかし、汚い堀立小屋で異臭がひどく、夜逃げして炭鉱に戻った。

桐野は、かな子をハイキングに誘ったが、かな子の答えは冷たかった。許婚者がいたのだ。高一も働きに出かけた。漁港の荷運びだ。喜一は佐賀のパチンコ屋に就職した。かな子は東京に転勤になった許婚者を追って鉱山から去った。高一は東京へ行った。しかし、東京へ着くとすぐ警察に保護された。中学生が、それも一人で九州から職を探しに来たという話に、不審に思った自転車屋の主人が警察に連絡したのである。送り返されて高一は炭鉱村に帰った。嬉しく泣く末子の肩を抱きながら、やはり兄妹一緒に生きていこうと思った。

監督：今村昌平

原作：安本末子

脚本：池田一朗／今村昌平

出演：長門裕之／松尾嘉代／沖村 武／前田暁子／穂積隆信／高原駿雄
北林谷栄／殿山泰司／西村 晃／浜村 純／小沢昭一／吉行和子

「にあんちゃん」1959年

原作は在日朝鮮人の少女・安本末子(当時10歳)の日記で、炭鉱町で両親と死別した兄弟姉妹四人の苦難を綴っている。作者は末っ子で、題名の「にあんちゃん」は次兄、つまり「二番目にいちゃん」の愛称である。長兄役の長門裕之を除く子役は公募で選ばれたのでスター不在の映画だが、脇を固める北林谷栄、殿山泰司、西村晃、浜村純、それに非常に若い小沢昭一、吉行和子らの役者のアンサンブルの見事さには日本映画の黄金時代ならではの魅力がある。ちなみに公募で姉役を得た松尾嘉代は女優として大成した。

1950年代末の石炭産業は重油との競合に敗れて、弱小炭鉱が次々と閉鎖されつつあった。そうした状況の中で長兄はクビになり、兄弟姉妹は働きに出たり他家へ預けられたりして離別するが、そのことによって家族の絆を強める。自立しようと東京へ出奔した「にあんちゃん」が連れ戻され、再会を喜ぶ妹の手を引いて歩き出すショットに「いつかまた、もっと広い所へ出て行く」というナレーションが流れる終幕には、哀しさや苦しさを超越した希望がある。

映画評論家：渡辺武信

【安本末子】

1943(昭和18)年、朝鮮籍の両親の四人兄妹の末っ子として、佐賀県東松浦軍入野村杵島炭鉱大鶴鉱業所の炭鉱町に生まれる。母を3歳で失い、父も小学校3年生の時に亡くなる。その父の「四十九日」から3年にわたって書き綴られた日記が、1958(昭和33)年に『にあんちゃん』十歳の少女の日記として出版される。

1966(昭和41)年、早稲田大学文学部を卒業。その後、コピーライター、創作童話作家として活躍する。1973(昭和48)年に結婚し、二児(一女・一男)の母親となる。